様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２２ 日現在

機関番号：３３９２１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｈ０１２３４

研究課題名（和文）中村古峡資料群と近代の〈異常心理〉に関する総合的研究

研究課題名（英文）A Comprehensive Study of Nakamura Kokyo's Materials and "Abnormal Psychology" in Modern Japan

研究代表者
竹内　瑞穂（TAKEUCHI, Mizuho）

愛知淑徳大学・文学部・教授

研究者番号：００５８１２２４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　5,450,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、中村古峡記念病院所蔵の中村古峡資料群の整理・データベース化を行い、近代日本の〈異常心理〉を軸とした知的・人的ネットワークを総合的に考究した。
資料群については、(1)旧蔵書：主要書籍データの入力、(2)書簡類：分類と全点撮影、 (3)古峡日記：全点撮影と「日記抄」のテキストデータ化、(4)療養日誌：分類と基礎情報の入力、(5)雑誌『黎明』：目次作成と全点撮影、(6)中村シウ手記：全点撮影と翻刻・現代語訳、を完了した。
これらの作業及び分析を通じて、近代日本の文学・精神医学・心理学の狭間で行われていた多岐にわたる文化活動と、療養所で行われていた先進的な精神医療実践の実態が明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
中村古峡資料群の主要資料の整理と基礎的データの入力が完了したことで、文学・心理学史・精神医学史などの関連領域から、より発展的な研究を行うための土台が整えられた。
書簡や古峡日記からは、古峡を結節点として、文学者や心理学者、精神医学者などが緩やかに繋がり合っていた実態がみえてきた。そして古峡の論文や雑誌『黎明』、療養日誌からは、西洋・日本の先端的な精神療法を組み合わせた治療実践が療養所で試みられていたことが明らかになった。
またこれらの研究と並行して行われた同時代テクストの分析からは、様々な場で〈異常心理〉が取り上げられ、多様な文脈と結びつくことで重層的な意味を生み出していたこと確認された。

研究成果の概要（英文）：In this study, we organized and compiled a database of Nakamura Kokyo materials, and comprehensively examined the intellectual and human networks created by the concept of "abnormal psychology" in modern Japan.
(1) Kokyo Collection of books: data entry of major books completed; (2) Letters: classification and photographing of all items completed; (3) Kokyo Diary: photographing of all items and conversion of "Diary Abstract" into text data completed; (4) Diary of Medical Treatment: classification and entry of basic information completed; (5) Journal "Reimei": creation of table of contents and photographing of all items completed; (6) Memoir of Nakamura Shiu: All items were photographed, reprinted, and translated into modern Japanese.
Through these tasks and analyses, we were able to clarify the wide range of cultural activities that took place between literature, psychiatry, and psychology in modern Japan, as well as the reality of advanced psychiatric practices at the sanatorium.

研究分野：日本近代文学、文化史

キーワード：中村古峡　日本近代文学　日本精神医学史　日本心理学史　異常心理

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

(1)　本研究が主対象とした中村古峡資料群については、これまで曾根博義による整理と研究が進められてきた。しかし、曾根が 2016 年に死去し、結果として資料群が整理途中のまま放置されることになってしまった。こうした状況を受け、曾根もそのメンバーの一員であった、近・現代の〈変態〉概念や〈異常心理〉をめぐる文化の研究に取り組んできた「メタモ研究会」（2004 年発足）がその遺志を継ぎ、会全体として資料群の研究に本格的に取り組むこととした。その後行われた中村古峡記念病院での予備調査では、古峡の旧蔵書に加え、本人の日記が、欠けはあるが明治末～戦後まで残されていること、古峡宛て書簡と原稿類が中型の和箪笥１棹分残されていることなどが確認された。「メタモ研究会」では、2016 年にこれまでの研究の成果を、竹内瑞穂＋「メタモ研究会」編『〈変態〉二十面相―もうひとつの近代日本精神史』（六花出版）としてまとめており、その過程で〈変態〉という概念が現代からは想像できないほどの広がりを持っていたことを改めて実感していたところであった。先の予備調査から見えてきたのは、古峡資料群がそのような〈異常心理〉をめぐるつながりを、より実証的かつ総体的に捉える基盤となり得る可能性だった。

(2) 研究開始当初の段階での本研究に直接関わる先行研究としては、雑誌『変態心理』の研究をまとめた小田晋(他)編『『変態心理』と中村古峡』(不二出版　2001)がある。この書は『変態心理』を中心に、同時代の〈変態〉概念の広がりを指摘した嚆矢といえるものであった。文学・文化史研究の領域でその流れを汲むものとして、竹内瑞穂『「変態」という文化』(ひつじ書房　2014)や、前述の『〈変態〉二十面相』などがある。また〈変態〉に関わった人物たちを通史的にまとめた概説書として、菅野聡美『〈変態〉の時代』（講談社現代新書　2005）がある。心理学史の領域でも、変態心理学や中村古峡が日本心理学の確立期に果たした役割の再評価が進められている（佐藤達哉・溝口元編『通史 日本の心理学』北大路書房　1997 など)。古峡という人物が様々な学問分野をまたにかけて活躍した人物ということもあり、そのほかにも精神医学史や思想史（兵頭晶子『精神病の日本近代』青弓社　2008 など）といった領域の研究もあげることができる。これら広範にわたる先行研究の数々が示すように、近・現代日本の〈異常心理〉概念を考究するにあたっては、多領域の超域的な協力が不可欠である。この点について、「メタモ研究会」は文学・文化史・心理学史・精神医学史の専門家たちによって構成されたまさに超域的な研究グループであり、この研究を推進するのにふさわしいと考えられた。

　本研究は、以上のような経緯と先行研究の蓄積を踏まえて構想されたものである。

２．研究の目的

(1)　本研究は、中村古峡資料群の整理およびデータベース（以下、DB と略記）化と、その成果を土台としながらの〈異常心理〉を軸とした知的・人的ネットワークの実態と意義の解明を目的とする。古峡とその周辺に焦点を当てた研究には、すでに『『変態心理』と中村古峡』(前出)があり、また古峡本人の人生や思想については、雑誌『変態心理』復刻に携わった曾根博義による研究の蓄積がある（「『殻』から『変態心理』へ」『文学』2(4) 2001.7、「中村古峡年譜」(小田晋(他)編 2001)など)。しかし、古峡を中心にどのような知的・人的ネットワークが形成されていたのかについては、個別的・断片的な情報が挙がってきてはいるものの、未だ明確にはされていない。本研究では、〈異常心理〉をめぐる知的・人的ネットワークという視点を導入することで、文学者をはじめとする文化人たちや、古峡の啓蒙的著作の読者たちや療養所刊行の雑誌『黎明』に参加する患者たちなどの間で、どのように〈異常心理〉の文化的意味が生成し共有されていたのか（あるいは共有されなかったのか)、といったより広い観点から問題を捉え直す。

(2)文学における〈異常心理〉というテーマは、「神経衰弱」「狂気」「幻覚」「無意識」といった多様な形態を取りつつ、純文学の各派や、さらには大衆文学にいたるまで満遍なく取り上げられてきた。本研究は、近代日本の〈異常心理〉のイメージや文化的意味を総体的に捉えることを目指すが、それは同時に、それぞれの作品に描かれた〈異常心理〉が、同時代の〈異常心理〉言説の全体のなかでどのような位置にあったものだったのかを、より正確に理解するための基盤を整備することにもつながり得ると考えられる。

(3) 心理学史や精神医学史の観点からみても、古峡資料群は非常に貴重なものである。例えば、同時代の心理学者や精神医学者とやりとりした書簡は、この時代の人的なつながりとそこでどのような情報や知識が共有されていたかを示すものとなる。本研究では、精神を病んだり、不安を抱えたりした人々から古峡に送られてきた相談書簡を通じて、この時代に心を病むということは当人たちにとってどのような経験として受け止められていたのか、そしてそれはどのような言葉で表象されるものだったのかを確認していく。また、患者本人による日々の生活記録と古峡によるコメントが綴られた療養日誌からは、療養所での治療の実態が多面的に浮かび上がっ

てくる。これらの資料を通じて、これまでの〈公的〉な言説を土台として析出されてきた「心理」観・「精神」観とは異質な、自身の切実な問題として「心理」や「精神」という概念と向き合うことになった人々の「心理」観・「精神」観を描き出すことを試みる。

(4)古峡資料群から見出せる〈異常心理〉をめぐる知的・人的ネットワークと、文学の領域での〈異常心理〉の物語、そして心理学や精神医学での〈異常心理〉をめぐる語りとが、それぞれ独立していた動きではなかったということに着目し、本研究ではそれらがいかようにつながり、または断絶していたかを分析していく。それによって、文学／心理学史／精神医学史の各領域における既存の研究を乗り越え、さらには超域的な学問的視角から、近・現代日本の〈異常心理〉への欲望を総体的に捉え直す契機とする。

３．研究の方法

本研究は、大きく分けて「中村古峡資料群の整理およびＤＢ作成」と「〈異常心理〉を軸とした知的・人的ネットワークに関する研究」という２つの課題に取り組む。

(1) 中村古峡資料群の整理およびＤＢ作成

中村古峡記念病院が所蔵する多種多様な資料群のうち、大きな割合を占める「旧蔵書」「書簡」「古峡日記」に加え、調査の過程でまとまった分量の所蔵が確認された「療養日誌」、雑誌『黎明』、「中村シウ（古峡実母）手記」の整理を行う。それぞれの資料の特性に応じて、「旧蔵書」については書誌データのＤＢ化、「書簡」については全点撮影と重要書簡の基礎データの入力、「古峡日記」については全点撮影と「日記抄」（新羅愛子作成）のテキストデータ化、「療養日誌」については全点撮影と基礎データの入力、雑誌『黎明』については全点撮影と目次作成、「中村シウ（古峡実母）手記」については全点撮影と翻刻および現代語訳、を実施する。なお、これらの取得データについては、個人情報の保護を最優先としながら、可能なものについては研究会ホームページ上のＤＢを通じて公開することを目指す。

(2) 〈異常心理〉を軸とした知的・人的ネットワークに関する研究

上記(1)で整理した資料群のデータを活用しつつ、〈異常心理〉を軸とした知的・人的ネットワークの実態や、その中で生み出されたものがどのように日本の社会・文化の中に拡散していったのかを、研究分担者・協力者それぞれの専門領域の視点から解析する。

①文学領域：
大橋崇行は明治初期の文学、島村輝は明治末期の文学、光石亜由美は大正期の文学、そして小松史生子は昭和期大衆文学における〈異常心理〉の分析を行う。また佐々木亜紀子と竹内瑞穂は中村古峡の文学に描かれた〈異常心理〉について検討する。

②文化史領域：
竹内瑞穂は「古峡日記」「書簡」「療養日誌」を〈異常心理〉をめぐるエゴ・ドキュメントという観点から分析する。光石亜由美は生駒市が保管する岸家文書内に残された古峡書簡の調査を行う。一柳廣孝は心霊学と〈異常心理〉を軸とした知的・人的ネットワークの関わりについて検討し、島村輝は昭和期エログロ誌における〈異常心理〉についての分析を進める。また坪井秀人は戦後文化における〈異常心理〉について広く分析を行う。

③精神医学史領域：
橋本明は古峡および中村古峡療養所の精神医学史的意義を検討する。

④心理学史領域：
安斉順子は中村古峡と心理学者たちの交流と、古峡の心理学的位置付けについて検討する。小泉晋一は古峡の催眠療法と神経症治療についての分析を進める。

⑶ 個人情報保護

本研究では、中村古峡の文筆業に関わる資料のみならず、中村古峡療養所の開所以降に作成された資料や治療相談の書簡なども扱う必要があり、それらには慎重に扱わなければならない個人情報が含まれていることも多い。「古峡日記」のような、古峡本人の個人情報に関わるものについては、遺族の許可を取りながら使用する資料とその範囲を決めていく。その他の資料については、現在、医療機関等が所蔵している医療記録を研究利用する際に従うことが求められている、文部科学省・厚生労働省「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」を基準とした。本研究は人文学系の資料研究となるため、医学系研究を対象とした当指針のすべてが当てはまるわけではないが、適合する「第 6 章　個人情報等及び匿名加工情報」などについては、これに従う。研究発表や論文等でこの資料を扱う際にも、この基準に準じた匿名化などを行なった上で使用することとする。なお、これらの方針については、2019 年度に研究代表者が所属する愛知淑徳大学の文学部倫理委員会に研究計画書を提出し、承認を受けている。

以上の方法を通じて得られた各研究者の研究成果については、10 回にわたって開催された研究会で報告・討議され、グループ内での情報の共有が図られた。

４．研究成果
以下、３項目に分けて主な研究成果を列記する。

(1) 中村古峡資料群の整理およびＤＢ作成
資料群のうち、「旧蔵書」については書誌データのＤＢ化が行われた。感染症拡大による緊急事態宣言などによって、およそ２年半にわたって中村古峡記念病院の現地調査ができなかったため、当初予定していた全資料のデータ入力はかなわなかったが、主だった蔵書についてはデータ入力を完了し、収集データについては中村古峡記念病院の許可を得た上で、今後の公開を前提に「国文学資料館データベース」に提供を行なった。
「書簡」については全点撮影と重要書簡の基礎データの入力を行なった。「書簡」データについては、当初の研究計画では、個人情報保護に対する必要な処置を行なった上で、研究会のホームページ上でＤＢを構築して公開することを予定していた。しかし作業の過程で、書簡には多くの個人情報が含まれ、かつそれらを一部でも匿名化してしまうと資料的な価値が大きく損なわれるものがほとんどであることが明らかとなった。ＤＢを公開することのメリットよりもデメリットのほうが大きいと判断されたため、当初の一般公開の計画は見送られることになった。
「古峡日記」については新発見分も含めた全点撮影と「日記抄」（新羅愛子作成）のテキストデータ化が行われた。「療養日誌」については全点撮影が予定されていたが、感染症拡大によって現地調査ができなかった影響で未完了となった。基礎データの入力については完了することができた。雑誌『黎明』については全点撮影と目次を作成。「中村シウ（古峡実母）手記」については全点撮影と翻刻および現代語訳が完了している。
感染症流行の影響によって、当初の研究計画からは変更された点も多かったが、今回整理・入力されたデータからは、古峡を結節点として、文学者や心理学者、精神医学者などが緩やかに繋がり合っていた実態を実証的に確認することができた。
また、整理によっていくつかの新資料が発見されたことも成果ではあったが、存在は知られていても手付かずだった多くの資料のデータ化が進められたことで、中村古峡資料群を研究材料として広く活用できる基盤が整えられたことが、より大きな成果であったといえる。同時に整理の過程では、これら資料情報の公開に際しては特に慎重な配慮と手続きが必要であることが明確になってきた。現在、何らかの工夫を施せば個人情報保護への対応が可能とみられる資料については、順次成果の公開ができるよう関係各所と交渉を進めている。

(2) 〈異常心理〉を軸とした知的・人的ネットワークに関する研究
上記(1)の成果を活用・参照しつつ、研究分担者・協力者それぞれの専門領域の視点から、〈異常心理〉を軸とした知的・人的ネットワークの実態について分析を行なった。

①文学領域
大橋崇行は、近世から近代に移り変わっていく時代の日本の文学と評論に着目し、心理学や精神医学の知見が様々な変容を被りながらこの領域に根付いていった過程を浮き彫りにした。島村輝は志賀直哉の作品などを対象としながら、〈異常心理〉表象の背後にある神話的世界観や民俗的伝承のつながりを明らかにした。また、小松史生子は「新宗教」や「怪異」を題材とする大衆文学（ミステリ）を取り上げ、そこに現れる〈異常心理〉を説明するロジックとそれを支える文化的背景を解き明かした。そして、佐々木亜紀子と竹内瑞穂は、中村古峡が文学を通じて描いた〈異常心理〉について検討している。佐々木は資料群の雑資料内に残されていた「古峡ノート」を用いて、古峡の小説「蕃地から」の創作意図を浮かび上がらせた。竹内は現代ではほとんど忘れ去られた古峡の〈狂気〉文学を、この時代の他の〈狂気〉文学が取りこぼしてしまっていた、〈狂気〉と共に生きざるを得なかった個々人の経験に焦点を当てたものとして、再評価を行なった。
また、2019 年の日本近代文学会・昭和文学会・社会文学会合同国際研究集会パネル発表「中村古峡資料群を読む―近代日本の〈異常心理〉文化の再考に向けて」では、文学者として世に出た中村古峡が、どのような立ち位置から近代日本の〈異常心理〉文化と向かい合っていたのかについて、竹内・大橋・安斉順子・橋本明の 4 名が報告を行なった。文学研究者だけでなく、心理学史や精神医学史の専門家も交えた議論を通じて、〈異常心理〉を取り上げた近代文学の周囲を取り囲む知的環境が如何なるものであったのかを整理して示す機会となった。そして、2021 年の日本比較文学会第 52 回中部大会シンポジウム「異常心理の比較文学」では、竹内・一柳廣孝・光石亜由美が登壇し、中村古峡・小酒井不木・谷崎潤一郎らの小説や評論を取り上げながら、近代日本の〈異常心理〉文化を海外文化・文学との比較を通じて捉え直すことが試みられた。
②文化史領域
竹内は「古峡日記」「書簡」「療養日誌」を、〈異常心理〉をめぐるエゴ・ドキュメントという観点から分析し、療養所において〈書くこと〉が、精神面の治療にとどまらず書き手の（再）主体化をもたらしていたことを明らかにした。光石は生駒市が保管する岸家文書内に残された古峡書簡の調査を行い、古峡の知的・人的ネットワークが他の知的・人的ネットワークとどのように繋がっていたのかを検討した。その成果は「生駒市図書館蔵　岸家文書・中村古峡書簡　画像データと翻刻」(2023)として、生駒市に提出されている。一柳は近代か

ら現代に至るまでの心霊学と〈異常心理〉を軸とした知的・人的ネットワークとの関わりを分析し、それらの成果は『怪異の表象空間』(国書刊行会　2020)として公刊された。また坪井秀人は戦後文化における〈異常心理〉について広く分析を行い、文学を軸に戦後文化を総体的に再検討した『戦後表現』（名古屋大学出版会　2023）などの著作に、その成果は反映されている。

③精神医学史領域

橋本は資料群に残された各種資料を用いて古峡および中村古峡療養所の活動実態を調査した。古峡の医療活動は、彼が影響を受けたとされる同時代の森田療法の影に隠れてこれまで注目があまりされていなかったが、実際には Dubois と Bérillon という西欧の医学者による治療理論・方法を融合させた療法の確立を試みていたことを指摘し、その精神医学史上の先駆性と特質を明らかにした。

④心理学史領域

安斉は中村古峡と心理学者たちの交流と、古峡の心理学的位置付けについて検討した。資料群の「書簡」内に残されていた、ジャストロー（アメリカ心理学会会長などを歴任した心理学者）やヒンクル（ユング派分析者）との翻訳権をめぐる交流からは、古峡が近代日本の心理学領域において先端的な位置にいたことが証明された。また一時期ともに活動していた久保良英との関わりを踏まえると、古峡の心理学者としての活動が、実は日本の教育心理学の先駆的なものであった可能性も指摘されている。

(3) 展示会の監修

本研究の成果に基づいた展示会「中村古峡の足跡を辿る－近代日本の文学・心理学・精神医学の“結節点”」が企画され、中村古峡記念病院に隣接する複合施設「古峡ヒルズ」内の中村古峡資料室のなかに常設展示が設置されることになった（2023 年 3 月設置、監修：竹内・大橋・小松）。施設の地域開放日に公開されるかたちが基本となるが、見学希望の申し込みをすれば随時観覧できることになっており、本研究の成果の一端をわかりやすく社会に伝える場となっている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計31件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　13件）

１．著者名 竹内瑞穂	４．巻 48
２．論文標題 中村古峡、変態心理小説の蹉跌：大正期〈狂気〉文学再考のための一視点（一）	５．発行年 2023年
３．雑誌名 愛知淑徳大学論集　文学部篇	６．最初と最後の頁 49-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 竹内瑞穂	４．巻 10
２．論文標題 中村古峡、変態心理小説の射程：大正期〈狂気〉文学再考のための一視点（二）	５．発行年 2023年
３．雑誌名 愛知淑徳大学大学院　文化創造研究科紀要	６．最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 大橋崇行	４．巻 233
２．論文標題 「見えがたきもの」と病：三遊亭円朝「怪談乳房榎」	５．発行年 2022年
３．雑誌名 文学・語学	６．最初と最後の頁 88-97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34492/bungakugogaku.233.0_88	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 大橋崇行	４．巻 22
２．論文標題 「人情」と心理学：坪内逍遥『小説神髄』再読	５．発行年 2023年
３．雑誌名 東海学園　言語・文学・文化	６．最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 安齊順子	4．巻 21
2．論文標題 教育心理学と中村古峡	5．発行年 2022年
3．雑誌名 法政大学教職課程年報	6．最初と最後の頁 64-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 一柳廣孝	4．巻 14
2．論文標題 臨床心理学以前：明治・大正期における「心理療法」の軌跡	5．発行年 2022年
3．雑誌名 臨床心理学増刊	6．最初と最後の頁 65-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 島村輝	4．巻 55
2．論文標題 感染症に幼子を奪われる話：文学者たちの一九〇九年	5．発行年 2022年
3．雑誌名 社会文学	6．最初と最後の頁 2-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 島村輝	4．巻 9
2．論文標題 龍の臥所：志賀直哉「剃刀」の秘奥	5．発行年 2022年
3．雑誌名 星灯	6．最初と最後の頁 65-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 橋本明	4．巻 71
2．論文標題 中村古峡と中村古峡療養所：戦前の私立精神病院の役割	5．発行年 2023年
3．雑誌名 愛知県立大学教育福祉学部論集	6．最初と最後の頁 39-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15088/00005087	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 小松史生子	4．巻 32
2．論文標題 戦後探偵小説と新宗教：高木彬光・横溝正史・松本清張	5．発行年 2022年
3．雑誌名 南山宗教文化研究所所報	6．最初と最後の頁 63-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 坪井秀人	4．巻 13
2．論文標題 過去の自分への手紙	5．発行年 2021年
3．雑誌名 跨境 ： 日本語文学研究	6．最初と最後の頁 8-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.22628/bcjjl.2021.13.1.8	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 酒井直樹、坪井秀人	4．巻 64(8)
2．論文標題 荒地を荒地として生きること　対話1	5．発行年 2021年
3．雑誌名 現代詩手帖	6．最初と最後の頁 48-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 酒井直樹、坪井秀人	4．巻 64(9)
2．論文標題 近代化の中の日本語　対話2	5．発行年 2021年
3．雑誌名 現代詩手帖	6．最初と最後の頁 116-127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 酒井直樹、坪井秀人	4．巻 64(10)
2．論文標題 国民語を再考する　対話3	5．発行年 2021年
3．雑誌名 現代詩手帖	6．最初と最後の頁 124-138
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 坪井秀人	4．巻 54
2．論文標題 権力と告白 ：〈更生〉につながれる転向の物語	5．発行年 2021年
3．雑誌名 社会文学	6．最初と最後の頁 52-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 坪井秀人	4．巻 53 (7)
2．論文標題 故郷とは子ども時代のこと ： 歌のなかの安野光雅	5．発行年 2021年
3．雑誌名 ユリイカ	6．最初と最後の頁 275-291
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 坪井秀人	４．巻 25
２．論文標題 デモクラシーと性=政治 ： ホイットマンの翻訳を中心に	５．発行年 2022年
３．雑誌名 有島武郎研究	６．最初と最後の頁 12-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 酒井直樹、坪井秀人	４．巻 65（1）
２．論文標題 国民語と天皇制 ： 対話４	５．発行年 2022年
３．雑誌名 現代詩手帖	６．最初と最後の頁 114-127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 坪井秀人	４．巻 15
２．論文標題 過ぎ去っていく過去 ： 湾岸戦争詩まで	５．発行年 2022年
３．雑誌名 日本現代詩歌研究	６．最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 酒井直樹、坪井秀人	４．巻 65（3）
２．論文標題 多言語性と日本語の死産　対話5	５．発行年 2022年
３．雑誌名 現代詩手帖	６．最初と最後の頁 148-159
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 酒井直樹、坪井秀人	4．巻 65（6）
2．論文標題 文明論的転移と日本文化論　対話6	5．発行年 2022年
3．雑誌名 現代詩手帖	6．最初と最後の頁 130-142
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 酒井直樹、坪井秀人	4．巻 65（10）
2．論文標題 「関係的同一性」から「種的同一性」への移行　対話7	5．発行年 2022年
3．雑誌名 現代詩手帖	6．最初と最後の頁 94-107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 酒井直樹、坪井秀人	4．巻 66(2)
2．論文標題 「種的同一性」と天皇制　対話8	5．発行年 2023年
3．雑誌名 現代詩手帖	6．最初と最後の頁 126-136
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 坪井秀人	4．巻 63(5)
2．論文標題 湾岸戦争詩論争とは何だったのか	5．発行年 2020年
3．雑誌名 現代詩手帖	6．最初と最後の頁 64-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 坪井 秀人	4．巻 80
2．論文標題 転形期としての一九八九年と元号問題	5．発行年 2020年
3．雑誌名 昭和文学研究	6．最初と最後の頁 43～55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.50863/showabungaku.80.0_43	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 坪井秀人	4．巻 63（11）
2．論文標題 日本語詩の地層をさぐる ： インタビュー	5．発行年 2020年
3．雑誌名 現代詩手帖	6．最初と最後の頁 20-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 九里順子、坪井秀人、宮崎真素美	4．巻 7
2．論文標題 （国際 HAIKU プロジェクトシンポジウム） 詩人と俳句：俳句と詩のバイリンガリズム	5．発行年 2021年
3．雑誌名 愛知県立大学文字文化財研究所紀要 = Memoirs of the Cultural Documents Research Institute, Aichi Prefectural University	6．最初と最後の頁 19-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15088/00004484	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 島村輝	4．巻 97（9）
2．論文標題 神様の小説 ：「作家・志賀直哉」の深層	5．発行年 2020年
3．雑誌名 国語と国文学	6．最初と最後の頁 3-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 安齊順子	4．巻 19
2．論文標題 教育心理学のルーツとしてのメンタル・フィロソフィー	5．発行年 2020年
3．雑誌名 法政大学教職課程年報	6．最初と最後の頁 46-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 安齊順子	4．巻 20
2．論文標題 松本亦太郎と教育心理学	5．発行年 2021年
3．雑誌名 法政大学教職課程年報	6．最初と最後の頁 36-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 佐々木亜紀子	4．巻 46
2．論文標題 中村古峡「蕃地から」の方法 ： 遺品「古峡ノート」と漱石「満韓ところどころ」をめぐって	5．発行年 2021年
3．雑誌名 愛知淑徳大学論集文学部篇	6．最初と最後の頁 95-108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計13件（うち招待講演　2件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 竹内瑞穂
2．発表標題 文学者・中村古峡の蹉跌：大正期文学の〈狂気〉表象からの逸脱
3．学会等名 日本比較文学会第52回中部大会　シンポジウム「異常心理の比較文学」
4．発表年 2022年

１．発表者名 一柳廣孝
２．発表標題 小酒井不木の場所：身体と精神のあいだ
３．学会等名 日本比較文学会第52回中部大会　シンポジウム「異常心理の比較文学」
４．発表年 2022年

１．発表者名 光石亜由美
２．発表標題 文学者は〈変態〉である
３．学会等名 日本比較文学会第52回中部大会　シンポジウム「異常心理の比較文学」
４．発表年 2022年

１．発表者名 一柳廣孝
２．発表標題 「幽霊」は変容する：文化としての怪異
３．学会等名 日本心霊科学協会月例講演会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 島村輝
２．発表標題 A world overrun by man-eating demons: "Influenza" that struck "Taisho"
３．学会等名 ICW ASIAN WRITERS FORUM（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 一柳廣孝
２．発表標題 漱石と八雲：心霊の時代を生きる
３．学会等名 漱石山房記念館文学講座（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 橋本明
２．発表標題 中村蓊と中村古峡療養所：戦前の私立精神病院の役割
３．学会等名 第24回日本精神医学史学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 竹内　瑞穂
２．発表標題 イントロダクション（パネル発表「中村古峡資料群を読む―近代日本の〈異常心理〉文化の再考に向けて」）
３．学会等名 日本近代文学会・昭和文学会・社会文学会合同国際研究集会
４．発表年 2019年

１．発表者名 大橋　崇行
２．発表標題 中村古峡記念病院所蔵資料調査について（パネル発表「中村古峡資料群を読む―近代日本の〈異常心理〉文化の再考に向けて」）
３．学会等名 日本近代文学会・昭和文学会・社会文学会合同国際研究集会
４．発表年 2019年

１．発表者名 安斉　順子
２．発表標題 明治大正の心理学、催眠と中村古峡（パネル発表「中村古峡資料群を読む―近代日本の〈異常心理〉文化の再考に向けて」）
３．学会等名 日本近代文学会・昭和文学会・社会文学会合同国際研究集会
４．発表年 2019年

１．発表者名 橋本　明
２．発表標題 精神医療史からみた 臨床家・中村古峡（パネル発表「中村古峡資料群を読む―近代日本の〈異常心理〉文化の再考に向けて」）
３．学会等名 日本近代文学会・昭和文学会・社会文学会合同国際研究集会
４．発表年 2019年

１．発表者名 竹内　瑞穂
２．発表標題 自己を書く日記／自己を書く書簡―中村古峡史料群の研究プロジェクトより
３．学会等名 学際シンポジウム「近代日本を生きた「人々」の日記に向き合い、未来へ継承する」
４．発表年 2019年

１．発表者名 安斉　順子
２．発表標題 大正時代の精神病院調査―中村病院調査中間報告
３．学会等名 心理学史研究会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計22件

1．著者名 田中祐介、柿本真代、河内聡子、鬼頭篤史、志良堂正史、竹内瑞穂、堤ひろゆき、徳山倫子、大木志門、西田昌之、大岡響子、大川史織、吉見義明、山田鮎美、島利栄子	4．発行年 2022年
2．出版社 文学通信	5．総ページ数 456
3．書名 無数のひとりが紡ぐ歴史	

1．著者名 栗田 英彦、石原 深予、一柳 廣孝、菊地 暁、神保町のオタ、平野 直子、吉永 進一、渡 勇輝	4．発行年 2022年
2．出版社 人文書院	5．総ページ数 251
3．書名 「日本心霊学会」研究	

1．著者名 怪異怪談研究会、乾 英治郎、小松 史生子、鈴木 優作、谷口 基	4．発行年 2022年
2．出版社 青弓社	5．総ページ数 330
3．書名 〈怪異〉とミステリ	

1．著者名 山田　雄司、福島嵩仁、中島篤巳、吉丸雄哉、川上仁一、酒井裕太、高橋圭一、橋本博、山口記弘、岡本聡、牧野悠、クバーソフ・フョードル、一柳廣孝、山本武利、河合勝、森正人、甲野善紀、三橋源一、小森照久、久松眞（他）	4．発行年 2023年
2．出版社 東京大学出版会	5．総ページ数 560
3．書名 忍者学大全	

1．著者名 大橋 崇行	4．発行年 2023年
2．出版社 青弓社	5．総ページ数 308
3．書名 落語と小説の近代	

1．著者名 和田博文、李征、王志松、高潔、王志松、木田隆文、単援朝、竹内栄美子、祝然、李イ、島村輝、山﨑眞紀子、横路啓子、和田桂子、楊柳岸、五味渕典嗣、梅定娥、藥師寺美穂、楊偉、河野龍也、大原祐治、鄒双双	4．発行年 2022年
2．出版社 勉誠出版	5．総ページ数 384
3．書名 中国の都市の歴史的記憶	

1．著者名 宇野田尚哉、坪井秀人、キアラ・コマストリ、川口隆行、木下千花、森岡卓司、鳥羽耕史、小杉亮子、ニコラス・ランブレクト、佐藤泉、成田龍一、徐潤雅、高榮蘭、村上克尚、石川巧、大塚英志	4．発行年 2021年
2．出版社 大阪大学出版会	5．総ページ数 370
3．書名 対抗文化史	

1．著者名 佐藤＝ロスベアグ・ナナ、池澤夏樹、坪井秀人、林圭介、佐藤美希、内山明子、邵丹、管啓次郎	4．発行年 2021年
2．出版社 みすず書房	5．総ページ数 264
3．書名 翻訳と文学	

1．著者名 Yoshinobu Shino、Baoqing Shao、Christopher Scholz、Hideto Tsuboi、Nicoletta Pesaro、Gerald Peloux、Ju-Ling Lee、Eun Jin Jeong、Suk-Hee Joo、Anne-Lise Mithout、Toshio Takemoto、Moduk Koo、Emmanuel Lozerand、Martina Codeluppi、Xinyu Hu、Lanfang Guo、Melinda Pirazzoli、Min Sook Wang-Le、Etienne Naveau　他	4．発行年 2022年
2．出版社 College de France	5．総ページ数 -
3．書名 Le corps dans les litteratures modernes d’Asie orientale: discours, representation, intermedialite	

1．著者名 坪井秀人、市川遥、葉暁瑶、ニコラス・ランブレクト、中村平、宋恵媛、解放、川口隆行、キツニック・ラウリ、鳥羽耕史、高榮蘭、高畑早希、田村美由紀、黒川伊織、石川巧、増田斎、小杉亮子、辛島理人、奥村華子、佐藤泉、光石亜由美、ホワニシャン・アストギク、飯田祐子、美馬達哉	4．発行年 2022年
2．出版社 臨川書店	5．総ページ数 376
3．書名 戦後日本の傷跡	

1．著者名 坪井 秀人	4．発行年 2023年
2．出版社 名古屋大学出版会	5．総ページ数 616
3．書名 戦後表現	

1．著者名 坪井秀人、朴光賢、朴貞蘭、son jiyeon、jang yuli	4．発行年 2020年
2．出版社 eomunhagsa	5．総ページ数 319
3．書名 nolaehaneun sinche	

１．著者名 坪井秀人、瀧井一博、白石恵理、小田龍哉	４．発行年 2020年
２．出版社 臨川書店	５．総ページ数 226
３．書名 越境する歴史学と世界文学	

１．著者名 坪井秀人	４．発行年 2020年
２．出版社 思潮社	５．総ページ数 464
３．書名 二十世紀日本語詩を思い出す	

１．著者名 Giacomo Calorio、Diego Cucinelli、Marta Fanasca、Hideto Tsuboi、Andrea Scibetta、Lin Yang、Meri Perna、Yan Xiaopeng,、Zhao Yinyin	４．発行年 2020年
２．出版社 Firenze University Press	５．総ページ数 154
３．書名 Tracing Pathways 雲路	

１．著者名 島村輝	４．発行年 2021年
２．出版社 かもがわ出版	５．総ページ数 112
３．書名 志賀直哉の短編小説を読み直す	

１．著者名 谷知子、島村輝、松田浩、竹内 彦、宋晗、小野 菜、勝田耕起、榎田百華、栃原茅乃、吉田弥生、佐藤裕子、田中里奈	４．発行年 2021年
２．出版社 花鳥社	５．総ページ数 242
３．書名 和歌・短歌のすすめ	

１．著者名 日比嘉高、藤田祐史、高木信、島村輝、中根千絵、塩村耕、大井田晴彦	４．発行年 2021年
２．出版社 三弥井書店	５．総ページ数 254
３．書名 疫病と日本文学	

１．著者名 一柳　廣孝	４．発行年 2020年
２．出版社 国書刊行会	５．総ページ数 384
３．書名 怪異の表象空間	

１．著者名 坪井　秀人	４．発行年 2019年
２．出版社 臨川書店	５．総ページ数 304
３．書名 ジェンダーと生政治（戦後日本を読みかえる 4）	

１．著者名 坪井　秀人	４．発行年 2019年
２．出版社 臨川書店	５．総ページ数 232
３．書名 高度経済成長の時代（戦後日本を読みかえる 3）	

１．著者名 坪井　秀人	４．発行年 2019年
２．出版社 三人社	５．総ページ数 603
３．書名 戦後日本文化再考	

〔産業財産権〕

〔その他〕

その他の業績として、以下のものがある。
【書評】竹内瑞穂「堀井一摩著『国民国家と不気味なもの 日露戦後文学の〈うち〉なる他者像』」(『日本近代文学』103 2020 pp166- 169)／【書評】小泉晋一「ミルトン・Ⅱ・エリクソン全集第2巻」(『催眠学研究』60,61 2022 pp90-91)
【企画趣旨】長谷川昭弘・小泉晋一「ジュネに再び注目することの意義」(『催眠学研究』58 2020 pp25-26)
【報告書】光石亜由美、長屋百花「生駒市図書館蔵 岸家文 書・中村古峡書簡 画像データと翻刻」2023年3月
【展示会】竹内瑞穂、大橋崇行、小松史生子 常設展「中村古峡の足跡を辿る-近代日本の文学・心理学・精 神医学の“結節点”」監修(古峡ヒルズ中村古峡資料室内)2023年3月

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	大橋　崇行 (OHASHI Takayuki) (00708597)	成蹊大学・文学部・准教授 (32629)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	橋本　明 (HASHIMOTO Akira) (40208442)	愛知県立大学・教育福祉学部・教授 (23901)	
研究分担者	一柳　廣孝 (ICHIYANAGI Hirotaka) (40247739)	横浜国立大学・教育学部・教授 (12701)	
研究分担者	小松　史生子 (KOMATSU Shoko) (60350948)	金城学院大学・文学部・教授 (33905)	
研究分担者	小泉　晋一 (KOIZUMI Shinichi) (80296376)	共栄大学・教育学部・教授 (32420)	
研究分担者	坪井　秀人 (TSUBOI Hideto) (90197757)	早稲田大学・文学学術院・教授 (32689)	
研究分担者	光石　亜由美 (MITSUISHI Ayumi) (90387887)	奈良大学・文学部・教授 (34603)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	島村　輝 (SHIMAMURA Teru)		

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	安斉　順子 (ANZAI Junko)		
研究協力者	佐々木　亜紀子 (SASAKI Akiko)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関